

仏教儀礼

本願寺仏教音楽・儀礼研究所 ニュースレター

対談：本願寺茶房「僧侶^{ちから}力は表現力」



はじめまして、儀礼と申します

儀礼って、なに？

親鸞聖人750回大遠忌法要を来年にひかえ、宗門内では《儀礼》という言葉が、頻繁に使われるようになりました。しかし、「儀礼とは何ですか？」と問われると、うまく説明できないという声をよく聞きます。おそらくそれは、儀礼という日本語が、宗教を研究する学者たちによって、明治以降に創られた学術用語だからでしょう。

儀式のことですか？

では儀礼は、どのような言葉で表現されてきたのでしょうか。宗教の現場、特に仏教界では、「法ほっ式」や「勤ごんしき式」、「儀式」などの言葉が使われてきました。一方で、《儀礼》という言葉は、「形式的な」という意味合いで一般に使われることが多いですね。この「形式的」というイメージは、特殊な訓練を受けた僧侶たちが、厳かに行なう儀式の「形式美」からきているのです。もともと宗教現場のある「形式」をさす言葉が、転じて、その中身を表すものとして変化し、儀礼は形式という意味で一般に広まりました。その結果、《儀礼》という言葉は、「今の言い方

って、儀礼的よね」というような、否定的な表現として使われるようになったのです。

マイナスイメージの払拭を

《儀礼》のイメージを一新すべく、本来の意味を皆さんに知って頂ければと考えています。現場のリーダー役（僧侶）だけでなく、信仰を持っておられる方、そして宗教に携わる全ての方に《儀礼》の本質に触れて頂きたいのです。なぜなら、宗教に《儀礼》は欠くことができないものですから。

儀礼あれこれ

専門用語として使われる《儀礼》には、さまざまな要素が含まれます。ですから、「儀礼＝儀式」と理解されてきた方には、本誌を読み進めていくにつれ、「これも儀礼？」と首を傾げられるかもしれません。広い意味でいうところの《儀礼》とは、宗教において「喜び」や「感動」、「感謝」など、心に湧きあがる様々な状態、つまり、ご信心に由来する〈中身〉を意識する、しないを問わず、身体動作をともなって《表現》することを指すのです。

皆さんにも、次のような経験はありませんか？ 非常に美しい朝日を見た時、感動して思わず手を合わせて拝んだり、あるいは、感嘆の声をもらしてしまったり。このような行為を、《儀礼》と言うのです。仏さまやご先祖さまに手を合わせること、お経を読むこと、供物すること、仏事における一連の所作を丁寧なことにすることなど、枚挙にいとまがありません。これらは全て儀礼行為と言え、知らず知らずのうちに経験している場合が多いのです。

儀礼がもたらすもの

また《儀礼》は、集団で共有する約束事でもあります。その結果、儀礼行為は「自然と仲間を増やし、秩序と安心感をもたらす」という、効果があります。それは、「同じ儀礼を行なう者は、同じ心情を共有する仲間」として認識されるからです。ですから、「儀礼は難しい」とか「意味が分からない」と思わずに、本誌を通じて、一人でも多くの方が、日頃自分が行なっている《儀礼》に、親しんで頂きたいと思います。

(常任研究員 多村至恩)

目次

◆はじめまして、儀礼と申します	2頁	◆タイムスリップ大遠忌 —— 700回忌編	8頁
◆本願寺茶房（第1回） —— 僧侶 <small>ちから</small> 力は表現力	3頁	◆しんらん古道	10頁
◆儀礼しています —— 合葬式共同墓（法縁廟）にまつわる“あれこれ”	6頁	◆センター所長だより	11頁
		◆表紙写真の解説	12頁

亭主 ^{おおむらえいしやう}大村英昭が不定期に開く本願寺茶房。ここでは、1日1客限定、しかもお気に入りの客人しか呼ばないという、ちょっと変わった処です。アカデミックな話を好む亭主が、最近関心をよせている《儀礼》について語りあう場として開きました。今日は、^{しやくていしやう}釈徹宗さん（兵庫大学 教授）を客人として、話が盛り上がっているようです。

亭主 大村英昭
客人 釈徹宗



僧侶力は
表現力

〈カタを倣う〉

大村：普通、〈儀礼〉という言葉は、あまり良い意味で使われませんね。

釈：たしかに、形だけで中身がないという感じがします。これは、外見より中身が優先される、近代知性の傾向のひとつでしょうね。

大村：“中身で勝負！”なんてことも、よく言われましたね。例えば、私が専門とする社会学でも、父親の役割を演じるといいながら、外見の振る舞いではなく、責任や義務といった、要は中身の機能についてだけが論じられてきました。

釈：それは、洋の東西を問わず、近代の宗教界においても同じです。見えない内面ばかりが問われ、伝統に培われた表現のほうは軽視されてきました。

しかし東洋には、武道や芸道もそうですが、〈カタ〉という一定の行為様式を習得することによって、肉体と同時に、精神をもコントロールしていく思想があります。宗教のもつ膨大なエネルギーも、儀礼という、一定の所作を繰り返すことによって、精神的にもコントロールされてきました。

大村：ということは、まずは〈カタ〉を倣うことから入って、内面の意味を理解することは、むしろ後からついてくるという発想ですね。

〈表現としての儀礼〉

大村：近代という流れの中で、宗教界に起きたことといえば、内面的な信仰を重んじるあまり、宗教が孤独な心の問題になったということでしょう。その結果、^{よみこ}悦びをともにするという意味での共同体を形成する力が大幅に低下したということですね。

釈：そこが問題なんです。ですが、儀礼という側面からみると、現在も伝統宗教は生きています。これは、先達から連綿と引き継がれてきた行為（儀礼）を通じて、時間や空間を越えて彼らと繋がることができるということを、感覚的に知っているからではないでしょうか。

大村：信仰という心のあり方が、儀礼という形に「表現」されて、子々孫々にも継承されているということですね。

釈：そうなんです。儀礼は、死者をも含めたコミュニケーションだと思います。

例えば、落語に“くやみ”という話があります。これは、お葬式など人間のさかしらな言葉が届かない場面では、「何と申し上げてよろしいやら」と言う決まり文句や、悲しみを表す一定のしぐさが威力を発揮するというお話です。

コミュニケーションを取りづらい状況では、

〈カタ〉通りの所作や決まり文句が、その場を共有する人々にとっては、唯一、共鳴できる場合もあるということでしょう。

おんじょう
〈音声による表現〉

大村：浄土真宗においても、儀礼による信仰表現は欠かせないものと思いますが……。

釈：お念仏でさえ、もともとは「限りない光と寿の仏にお任せします」という意味の《定型の信仰告白》であったのではないかと思います。ただし、その〈信仰告白〉が、浄土真宗では「仏のよび声」へと転換されます。そのため、お念仏を儀礼として論じることは、——まあ自力っぽくなるのでしょうか——難しくなるのです。

大村：それでも、「南無阿弥陀仏」が声になって表われてくださるという点は大切ではないでしょうか。

例えば、読書もそうですが、黙読では孤独な営みとなり、言葉が頭の中を廻るだけとなります。音声になって初めて耳に響いて、豊かな経験となるのだと思いますし、音読によって、みんなのものにもなるわけです。

釈：同じようなことを、以前、学生から聞きました。その子は、大好きだった父の死によるショックで、突然自分の視界から色が消えてしまったというのです。ところが、お坊さんと一緒にお経をあげたときだけ、色を取り戻せたと言っていました。

大村：仏の心が音声となって初めて、その方の心に響いたのでしょうね。そのことは、お経だけにとどまりません。



亭主 大村英昭

五木寛之さんは、弟さんの死後、涙も出なかったのに、『御文章』をお坊さんが朗読してくださった時に、初めて号泣されたそうです。

音声となって心に響くということと、「共にする」ということが、儀礼のポイントかもしれませんね。

〈本音と建前〉

大村：宗派に目を向けてみますと、ご法義の中身が心の中だけで大切にされるあまり、これまで、儀礼によって表現される豊かな世界が見落とされてきたように思われます。

釈：たしかに現場は、教学として習った通りにいきませんね。

私のお寺で、若いときから非常に熱心にご法話を聞いてこられた門徒さんがおられます。その方が、30歳代前半の末っ子を癌で亡くされたとき、お逮夜のおつとめ中に「あかなあ」とつぶやかれたのです。わけを尋ねると、あれだけ「仏さまにお願いするものやない」と聴いてきたのに、いざ息子の命が危ないとなると、「助けてください」とお願いせざるをえなかったというのです。



客人 釈徹宗

でもこれは、それまでに真面目にご法話を聴き続けてこられたからこそ、いざとなると建前通りにはいかない自分に気づかれたのだと思います。

大村：そのように内面の意味上では矛盾を抱えた現場において、でも、矛盾があるままに、二つの内容をともに活かしていくことこそ、儀礼表現の妙味ではないでしょうか。

釈：その通りだと思います。

得度を受けると、まず専門の知識を勉強して、門信徒に説かねばなりません。

大村：先生の役ですね。

釈：加えて、誰にでも開かれた念仏の場を創り、その場を守る役として、「調声」（読経のリーダー役）や「莊嚴」（浄土世界の創出）に勤めなければなりません。

大村：まさに「住職」ですね。

〈場を揺さぶる者〉

釈：さらに私は、トリックスターの役目もあると、思っているのです。

大村：「道化」の役でしょうか。

釈：道化というか、その場を揺さぶる役目です。

例えば死者儀礼において、僧侶は遺族の中へ「他者」となって入り込んでいきます。そして、遺族の悲しみに寄り添いながらも、「白骨章」（五帖第一六通）を読むことによって、人間は死ぬものだというメッセージを伝えるのです。

悲しみに寄り添いながらも、他方では、人びとを「死」と向きあわせると言いますか、情に流されない厳粛な事実の伝達者でもなければなりませんので、二重の役柄を同時にこなすという意味で〈トリックスター〉ではないかと思うのです。

大村：なるほど、場を演出するという以上に、場を揺さぶる者でもあるということですね。



積 徹宗 (しゃくてっしゅう)

1961(昭和36)年、大阪府生まれ。龍谷大学大学院文学研究科博士課程単位取得。大阪府立大学大学院人間文化学研究科博士課程修了。学術博士。兵庫大学教授。浄土真宗本願寺派如来寺住職。本願寺教学伝道研究所委託研究員。NPO法人リライフ代表。著書『親鸞の思想構造—比較宗教の立場から』(法藏館)、『いきなりはじめる仏教生活』(バジリコ)、『仏教ではこう考える』(学習研究社)、『宗教聖典を乱読する』(朝日新聞出版)他多数。

亭主のほっと一息

同じ「ご信心」と申しましても、これを個々人の内面(=中身)のほうから考えるか、それとも信心を皆がともにする〈表現〉の面から考えるかによって、話の筋道は大いに違ったものになります。《中身より表現》。ここの理解がないと、〈儀礼〉は単なる形式で終わってしまうのです。

ことに真宗僧侶の場合、〈中身〉という点では、よく言われますとおり、在家門信徒とも同じ“一聞法者”にすぎません。当然、僧侶といえども、在家者となんら差異がない以上、同じ経文を読誦しながら、一方的に“ご法礼”を頂戴する側にいるのはおかしいわけです。ならば一体、僧侶の立つ瀬はどこにあるのでしょうか。ここでの亭主の答えは、儀礼という側面から〈表現力〉となりました。

そこで、このところ各所で目立った発言をされている積徹宗さんをお招きして、語り合うことにしたのです。すると、さすがは積さん、亭主の気持ちを汲み、まずは〈カタ〉から入ることの意義を示され、続いて〈カタ〉通りであることが、場合によってはかえって人びとの心に馴染むことの不思議を、落語の“くやみ”を例にあげて説明してくださいました。

亭主が寺を継いで間のなかった若僧の頃、ご信心の中身で勝負するには余りにも未熟でありましただけに、倣った〈カタ〉通りの儀礼表現だけが唯一の依りどころであったことなど、積さんとお話しながら、懐かしくもあらためて嘯みしめさせてもらいました。



大村英昭 (おおむら えいしょう)

1942(昭和17)年、大阪府生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。大阪大学名誉教授・関西学院大学教授。浄土真宗本願寺派圓龍寺前住職。本願寺仏教音楽・儀礼研究所客員研究員。著書『臨床仏教学のすすめ』(世界思想社)他多数。

2009年度 研究スタッフ

所長 小野 功龍 (雅楽研究)

〔儀礼部門〕

常任研究員 多村 至恩 (宗教社会学)

研究員 大田 壮一郎 (歴史学)

佐々木 正典 (臨床真宗学)

研究助手 岡尾 将秀 (宗教社会学)

客員研究員 大村 英昭 (宗教社会学)

杜多 隆信 (勤式)

委託研究員 轡田 智文 (勤式)

武山 晃隆 (真宗学)

直林 不退 (歴史学)

前田 正樹 (アート・マネジメント)

山田 雅教 (歴史学)

(各五十音順)

研究所では、僧侶やお寺の機能を活かした実践的な儀礼活動を、調査しています。具体的な活動の紹介を通じ、様々な儀礼のあり方にふれていただきましょう。

合葬式共同墓《法縁廟》に まつわる“あれこれ”



教覺寺 合葬式共同墓《法縁廟》

教覺寺（東京教区静岡西組）

静岡県は、浄土真宗の寺院が少ない地域です。今日は、そのような土地柄で、様々な活動を積極的に展開している、松江山教覺寺の例をご紹介します。

所在地の静岡市は、人口が増加傾向にあり、それに伴う墓地不足が深刻な問題となっています。市街地にある教覺寺も例にもれず、すでに20世紀の終わり頃には、納骨堂と境内墓地が限界となっていました。このような状況のもと、共同墓への模索が始まります。

南莊住職の想い

住職となって、親鸞聖人のみ教えにふれるなか、大谷本廟のような共同墓への想いが漠然とあったそうです。「個人の遺骨やお墓をご縁に、阿弥陀如来の本願に遇わせていただくこと」を実現するには、どうすればよいか？という想いをめぐらしていた折、墓地問題が浮上しました。

歴代住職の教化によって門信徒が増大したことで、教覺寺に納骨したいという要望に応えきれなくなったことや、境内の個人墓が地震で倒壊・破損する恐れが出てきたことなどが、結果として、門信徒方との協同作業による共同墓への道を開いたのです。

新しい墓地のあり方とは

住職の想いを受け、1996（平成8）年2月に「教

覺寺境内・墓地問題研究会」が発足します。同研究会では2年間に亘り、現地視察を含め、教義や法律、都市計画など様々な面から検討が行われました。その結果、教覺寺歴代住職・寺族をはじめ、御同朋が「同じ処に還っていく」ことを実感できるシンボルとして、合葬式共同墓の建設が提言されました。

教覺寺の場合、その特徴は、①ほぼ制限なく納骨可能であること、②同じ信仰のもとに集う多くの人々によって維持・管理が行なわれること、③そこに関わる人々が朋友となり得ること、④ともに聞法し、お念仏の喜びを分かちあえること、にあります。



南莊宏住職



教覺寺境内・墓地問題研究会のメンバーと
門徒推進委員の皆さん

《法縁廟》の完成と噴出した問題

こうして、「教覚寺境内・墓地問題研究会」の提言を受ける形で、合葬式共同墓《法縁廟》の建設が決定しました。そこで、全門信徒に向けアンケート調査を行った結果、境内にあった個人墓(約250基)のうち、予想をはるかに上回る約半数の方が、共同墓への改葬を希望されていることが明らかになりました。

しかし、問題はここからでした。個人墓の半数が無くなると、お墓が点在することとなり、景観の改善と境内の有効活用のために、残ったお墓の境内地内移設の必要性が出てきました。しかし、お墓を残したいと思われる方のなかには、今ある場所にこだわる方やお墓の移設に疑問を持つ方、親戚との問題など、各家庭により様々な事情があり、その説得が大きな課題となったのです。

この解決には、難航が予想されましたが、住職と役員や世話人による根気強い説明の結果、完成から5年を待たずして、残留を決められた50基(20%)の個人墓を境内の一区画に移設し、残りの200基(80%)は法縁廟へ改葬される運びとなりました。

門信徒の思い“いろいろ”

法縁廟の完成によって、喜ばれた方は沢山いらっしゃいます。特に、積極的に境内地の個人墓から改葬されたのは、総代や役員、そして「教覚寺境内・墓地問題研究会」のメンバーや門徒推進委員の方々でした。お寺の活動に関わるなかで、懐かしい先代住職や寺族、そして仲間と共に納骨ができ、またお浄土で遇えるという確信が、彼らを積極的にさせたと思われまふ。この背景には、長い間の教化と日々聴聞する姿勢があつたことと感じました。

しかし一方では、法縁廟の完成に複雑な思いを抱えている方もいないわけではありませんでした。そのなかの「改葬や個人墓移設に最初は反対していた

が、のちに法縁廟に納骨された方」数名にお話を伺いました。

—境内に個人墓を残す場合、場所の移動をしなければならぬということを知った時、どのように感じましたか。

—先祖代々続く墓所を、お寺の都合で、しかも自分の代で移すことに納得がいかなかった。

こうした背景には、自分が苦勞して建てたお墓であつたり、理由があつて自分が護ることになつたお墓であつたり、先祖が眠る場所を動かすなんて・・・など、様々な事情がありました。

しかし、個人墓の多くが改葬されていくにつれ、気持ちが変わつていったそうです。もしかすると、自分が執着しているだけではないか——と気付かれてから、家族や良き仲間の助言に耳を傾け、葛藤の末、現在は法縁廟にお世話になっている、とのことでした。

広がる法縁

法縁廟に納骨されている方はみな、それぞれの背景と思いを持たれています。最初から賛同の方、絶対反対だつた方、どうして良いか悩んだ方・・・しかし、お話を伺った皆さんが「今は、安心です」と答えられました。今や、共同墓が「家」という概念を取り払つたかのようなようです。調査では、自分の実家から改葬したとか、嫁いだ姉妹を分骨したとか、親戚も入りたがっているというお話も多数伺い、みなが教覚寺ファミリーの一員であるという印象を受けました。

ここで最も大切なことは、納骨の条件として、寺院活動の参加を徹底する「有縁の方々のお墓」であることに尽きるでしょう。このことが、おのずと聴聞の機会を増やし、寺族や門信徒同士が交流するなかで、「安心」という言葉を導いたのだ、と確信しました。



ワンポイント儀礼

人は「一人で生まれて、一人で死に往く」ものですが、親鸞聖人は「またお浄土で遇わせていただきましょう」と『親鸞聖人御消息』のなかで記されています。南荘住職が目指された合葬式共同墓は、まさにこの「俱会一処」の精神に基づいたものです。法縁廟をご縁に、同じ思いで集う者たち(御同朋)が、聞法をはじめとする寺院活動に参加すること(御同行)によって、また遇うことができると思える・・・とても豊かなことではありませんか。

このように儀礼には、思いを同じくする集団に、安心感をもたらすと同時に、集団を守る(和を乱さない)という特性があります。まさに皆さんがおっしゃる「安心」という言葉こそ、見えない存在ながらも、儀礼が機能していることの証でしょう。

(常任研究員 多村至恩)

大遠忌法要は、長い伝統と歴史に支えられてきました。ここでは、昔の大遠忌法要をふりかえりながら、その意義にふれていただきます。

大遠忌とは

報恩講だいおんきと大遠忌

真宗では、「報恩講」を一年のうちで最も大切な法要としてお勤めします。ご存じのように親鸞聖人のご命日に、ご遺徳を偲ぶ「報恩謝徳」の法要です。このご命日の法要「報恩講」を50年に一度、宗門をあげて大々的に行うことを「大遠忌法要」と言います。

遠忌法要おんきのいわれ

他宗では一般に、亡くなった人の命日に、月忌や年忌（とくに七回忌や十三回忌）などの「追善仏事」を行います。これは、中国から日本に「十仏事」として伝わった十王信仰がもとになっています。日本では、平安時代から鎌倉時代にかけて、「十仏事」に七・

十三・三十三回忌を加えた「十三仏事」が広まり、遠忌法要の基本的な形になりました。

浄土真宗の遠忌

これに対し、50年毎に遠忌法要を行う習わしは、江戸時代になってから盛んになりました。今では、どの宗派でも祖師の遠忌法要が行われていますが、はじめは1561（永禄4）年に勤められた親鸞聖人の「三百年御忌」（同時代の記録が現存する最初の大遠忌法要）のようです。

大遠忌という呼称

また、現在の本願寺では、親鸞聖人はじめ歴代宗主等の遠忌法要がお勤めされますが、親鸞聖人の

本願寺「大遠忌」法要期間の変遷

— 300回忌～700回忌 —

300回忌	1561（永禄4）年 ： <10日間>
600回忌	1861（文久1）年 <10日間>
650回忌	1911（明治44）年 <2期20日間>
700回忌	1961（昭和36）年 <2期25日間>

場合のみ「大遠忌」と呼ぶようになったのは、650回忌（明治時代）または600回忌（幕末）以降のことです。このように、大遠忌法要は浄土真宗に端を発し、日本仏教界全体に浸透した、他に類をみない画期的な仏教儀礼と言えましょう。

昭和36年はこんな年

主なできごと

<世界>

- ・ケネディ、第35代米大統領就任
- ・ソ連のガガーリン、ヴォストーク1号で人類初の宇宙飛行

<文化>

- ・松本清張『砂の器』ベストセラー
- ・映画『ウェストサイド物語』公開
- ・柏嶋時代はじまる

<生活>

- ・食品用ラップの発売
- ・スキー、登山等のレジャーブーム

<流行歌>

- ・上を向いて歩こう
- ・銀座の恋の物語

700回大遠忌がつとまった昭和36年、日本は高度経済成長期を迎えていました。テレビの世帯所有率は6割を超え、またこの年は『シャボン玉ホリデー』や連続テレビ小説など娯楽番組が始まり、本格的な映像メディア時代の到来といえる象徴的な年でした。一方、本来“集まり”“体感する”ものであるイベントに、“視聴する”という新たな要素が加わったことで、人々のイベントに対する意識や態度が変わっていった時期でもあります。

“寺離れ”や“法要離れ”とい



昭和30年代の京都寺町付近
(提供=粟井勝治氏)

われる昨今ですが、その背景に、こうした社会全体の変化があったことも考慮しておく必要があるでしょう。

700回大遠忌法要の様子

親鸞聖人700回大遠忌法要は、昭和36年3月10日～21日（第1期）、同年4月4日～16日（第2期）の計25日間にわたって厳修されました。この間の参拝者数は延べ100万人とも言われ、予想をはるかに上回る参拝者に、当初予定された日程が急遽5日間延長されるほどでした。当時の資料から、その熱気を皆さんに感じていただきましょう。

交通

なんと言っても全国各地から（海外からも）多くの団体が上山するわけですから、交通手段の確保も大変です。1911（明治44）年の650回大遠忌法要では、汽船がチャーターされたり団参用の臨時鉄道駅（梅小路仮停車場：現梅小路公園）が設けられたりしました。

700回大遠忌の主な記念事業

- ・本願寺会館 落成
- ・意識聖典 制定
- ・『本願寺史』 出版
- ・本願寺展 開催 など



大遠忌法要を伝える本願寺新報

◆参考資料

- 『本願寺風物誌』（経谷芳隆著）
- 『本願寺新報』
- 『親鸞聖人七百回大遠忌法要要覽』（龍谷大学図書館蔵）



臨時バス停車場（堀川通）



伝道車



御影堂上空から



増設参拝席

この700回大遠忌法要では、新たに大型バスが輸送機関として活躍しました。これに対応すべく、本山門前の堀川通（七条～花屋町間）は臨時バス駐車場となり、ここに全国から数千台のバスが参拝団を乗せてやって来ました。多い日には、百数十台ものバスが堀川通りに並んだといいます。この光景に京都の人々は、さぞかし驚いたことでしょう。

メディア

700回大遠忌法要の特徴の一つとして、映像メディアの活用が挙げられます。まだテレビの全国放送がはじまって間もないこの頃、法要が全国ネットで中継されたのです。また、御影堂に入りきれなかった参拝者のために、白洲や増設参拝席にモニターが設置され、法要の様子が中継されました。このように、50年も前から法要に映像中継が利用されていたというのは意外な感じですが、それだけ700回大遠忌法要が盛大だったという証でしょう。

新たな法要のかたち

50年に一度行われる大遠忌法要

ですが、おつとめは毎回同じ内容でされるわけではありません。50年毎に新たな工夫がなされ、時代に即した法要を目指して、法式の改定や新たな試みが行われました。この700回大遠忌法要で特筆すべきものは、大衆唱和を念頭においた『奉讃大師作法 第一種』の制定です。これ以降、内陣だけでなく、現在のように外陣の参拝者もともに読経をするようになったのです。

盛儀だった700回大遠忌法要

このように、700回大遠忌法要は盛儀を極め、宗門内外に教団の繁栄を知らしめることになりました。家庭で、あるいは門徒さん達との語らいの中で、「この前の大遠忌はどうだったの?」と、700回大遠忌のご縁に遇われた方のお話をうかがう機会があれば、もっと臨場感あふれる当時の様子を知ることができるでしょう。私達も50年に一度の御勝縁にあらためて感謝しつつ、700回大遠忌法要の熱気に負けないよう、来る750回忌大遠忌法要を盛り上げてお迎えしたいものです。

（研究員 大田壮一郎）

しんらん古道

親 鸞聖人750回大遠忌法要を来年にひかえ、上山の計画も進められていることでしょう。かねてより、本山へ参拝・団参の折に、市中ご旧蹟めぐりのプランや解説が欲しいという声をよく聞きます。そこで当研究所では、かつて聖人が歩かれた(とされる)「道」に着目しました。史実と伝承が織りなす豊かな「道」を私たち自身がく歩く=体感すること、聖人のご生涯に思いを馳せ、み教えを新しい気持ちでいただきませんか。

近 年の“歩き”ブームの要素も取り入れつつ、宗教には欠かせない儀礼の「身体性」や「伝承」を体感することを目的に、新しい「巡拝」のスタイル=「しんらん古道」を提案していきます。

たとえば
こんなコース

模索する親鸞聖人

— 延暦寺から六角堂まで —

- ①延暦寺→②きらら坂(登山口)
京都方面から比叡山に登る古道(行者道)のひとつ。道中やや急な所もあるが、全体に歩きやすく、所要時間は2時間程。坂下の「きらら橋」のたもとに親鸞聖人御旧蹟の石碑が立つ。
- ②きらら坂→③北山別院
音羽川沿いを下って、右手に赤山禅院(玉日姫の伝承)、左手に曼殊院(天台宗門跡寺院)がある。白川通から一本、山側の道(修学院山端線)を南下し、一乗寺下り松を過ぎると、やがて北山別院への道標に至る。
- ③北山別院→④六角堂
千日回峰行者の歩く「京都大回り」(延暦寺-赤山禅院-八坂神社-清水寺-)の道を辿りたいが、六角堂まではかなりの距離がある。交通機関(市バス65系統など)の利用も。

①比叡山延暦寺

若き日の修行の地。比叡山内の無動寺谷大乘院には、修行中の身ながら六角堂に参籠する聖人の身代わりとされた「そば喰いの御像」が安置。今も厳しい行がおこなわれている。



②きらら坂

②きらら坂

雲母坂とも。坂下の登山口には江戸時代まで雲母寺があった。

③北山別院

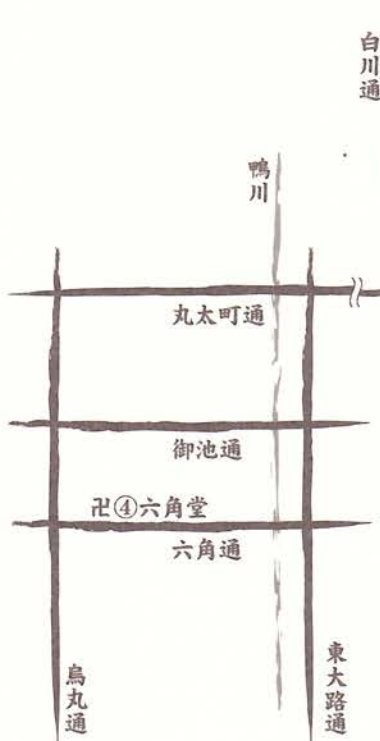


③聖水山北山別院

比叡山との往復時の休息地とされ、「影向石」や「聖水井」の旧蹟がある。

④六角堂(頂法寺)

聖人が百日参籠を行い、九十五日目の夜に夢告を得たとされる地。華道で有名な池坊が現在の本坊。今も昔も庶民信仰の寺として賑わう。西国観音三十三ヶ所の一つ。



予告 一緒に歩こう“しんらん古道”

研究員の案内で、

親鸞聖人の御生涯をしのびつつ、

四季の都路を一緒に歩いてみませんか

※日時、コース等の詳細は、Webサイト等にて発表いたします

いろいろ法要を勤め、大事にしてきました。しかし、その法要がどのような意味をもっているのか、み教えとどのような関わりにあるかなどは、一部の方々を除いては、あまり問題にされてこなかったのではないのでしょうか。

法要の根本には、仏さまを讃嘆させていただき、仏さまにお仕えするという儀礼の問題が大切になってきます。

全く私見ですが、仏、法、僧に心から帰依いたしますと、我われ仏教徒は、三帰依文を唱和しますが、これも儀礼の大切な作法ではないのでしょうか。

大きな法要のはじまりには、「三奉請」を合誦いたします。これは阿弥陀如来、釈迦如来、十方諸仏をこの法要の場にお招きして、心より仏さま方を讃嘆させていただき、仏法が説かれた教典を読誦し、その教法を聞かせていただきます、というお心でしょう。

中国の法照禪師は、五台山で浄土の莊嚴や、浄土の阿弥陀仏や諸仏のはたらきを感じられ、それを文書に記述されており、それが天台宗の声明となり、我われ真宗もその声明の流れをうけていると聞きます。

仏さまに心をこめてさまざま法要を厳修し、その法要の作法を儀礼と考えてきましたが、勿論それにとどまらず、宗教生活すべてが儀礼と関わるのではないのでしょうか。

先年、百歳をこえておられた永平寺の故宮崎奕保貫首は、かつてNHKの対談で瀬戸内



浅井成海センター所長

寂聴師に「すべては行です。生活のすべては行です。スリッパが曲っていたら、それを直します。それが行です。」と語られました。禅宗では、生活すべてが修行であり、仏さまにお仕えする事だと考えておられることが知られます。み教えと一つ一つの儀礼とはどのように関わるかを問うことも大切ですが、仏さまを中心とする生活そのものが、どのような意味をもっているか、今まで見すごしてきた一つ一つを問い直し、学んでいく事が、お念仏を申し、お念仏に聞くことと深く関わる事が知られます。

これから、今まで以上に本願寺仏教音楽・儀礼研究所より、いろいろな問題をみなさまに発信したり、問題提起していきますので、ぜひ関心をもってご意見やご助言をいただきたいことです。

研究活動の紹介

——真宗儀礼論研究より

リーフレット『お彼岸』が出ます。お彼岸の歴史といわれ、お墓まいりについて記しています。

2月より当研究所のWebサイト（奥付のアドレス参照）にて、PDFファイルを掲載予定。

ダウンロードして、ご参拝の方にお配りいただけます。

編集室より

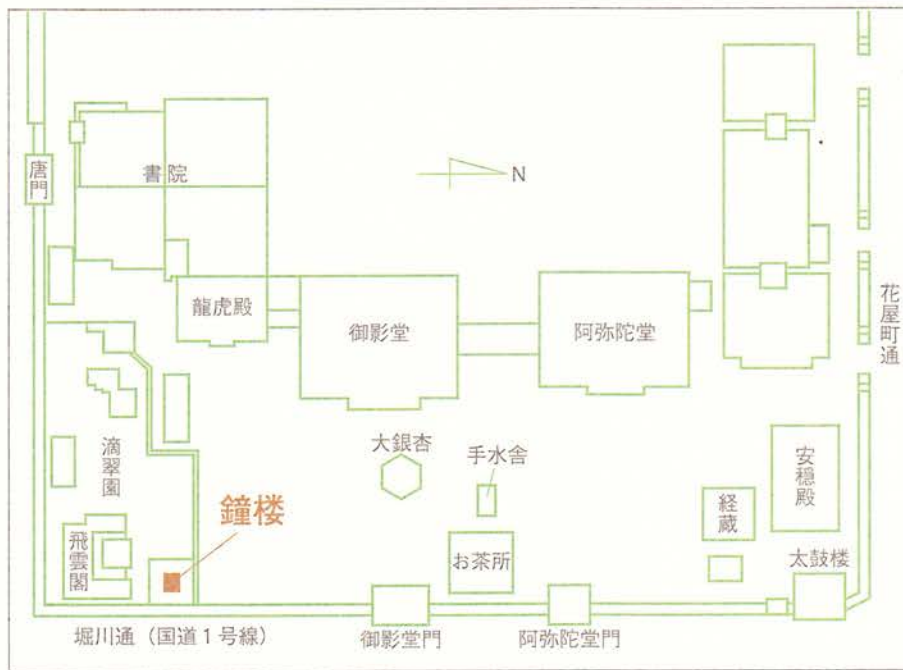
ニューズレター初の仏教儀礼編をお届けします。“儀礼”という幅広い分野について、一つでも多くのことがらを伝えたいとは思っているものの、わずかに数十ページに収めることなど、夢のまた夢…。積み残しは、次号へのエネルギーに変えるとして、今号を手にとっていただいた方に、まずは“儀礼とはなんぞや”が伝われば幸いです。（ふ）

表紙写真の解説——本願寺鐘楼欄間の虎と豹

写真の動物は、本刹境内の鐘楼欄間に彫られている虎です。本願寺で虎といえば、極彩色の彫刻で有名な国宝の唐門や、白書院の「虎の間」などをイメージされた方が多いでしょう。写真の2匹、虎と豹にみえますが、実はどちらも虎として彫られています。それは、虎が棲息しない日本では、江戸時代まで豹は虎のメスと考えられていたからです。つまり、虎のオスとメスのつがいとして鐘楼を飾っているのです。また、虎と共に竹も彫られています。これは經典に出てくる「捨身飼虎」という有名な仏教説話がモチーフになってい



滴翠園（てきすいえん）から望む鐘楼



ます。本刹境内には他にも「虎溪の庭」や「虎石」など、虎にちなむ名称がたくさんあります。皆さんも上山の折にぜひ探してみてください。

* * *

初代の鐘は、平安時代末期の铸造とされ、現在は安穩殿で見ることができます（重要文化財）。現在の鐘は、全国講社連絡会の寄進による二代目のものです。鐘楼そのものは、桃山時代の様式を備えており、本刹境内の中で最古の建築物といわれています。

仏教儀礼

本願寺仏教音楽・儀礼研究所 ニュースレター 第10号

発行日：2010（平成22）年1月

編集：本願寺仏教音楽・儀礼研究所

発行者：浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター 所長・浅井成海

〒600-8349 京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町92番地 本願寺第3庁舎内

Tel：075-371-9244 Fax：075-371-5761

<http://crs.hongwanji.or.jp/ongi/>

頒 価：無料

協力・写真提供：本願寺出版社、樹林舎、栗井勝治